

# 『吾輩は猫である』—『草枕』—『虞美人草』フローチャート

(Junko Higasa 2013.5.6)

	吾輩は猫である	草枕	虞美人草
社会	日露戦争勝利によって世界に道が開かれたが、進出を西欧に阻まれる。それを乗り越えるため、西洋文明に追いつこうと基礎的観念なしに上辺だけの西洋化が加速していく。人を遠くまで運び、行動範囲を拡げる鉄道が発展し、命に値段をつける保険が誕生する。便利のリスクをカヴァーしながら急速に利潤を追求していく。 <b>発展</b>	戦争はどの国においても莫大な赤字をもたらす。戦死者が増える中での人員調達と資金調達の苦心。家督存続と財産保有の条件に応じて徴兵が決まる。自ら選択不可能な命の分かれ道。経済と生命の困窮。水面下で革命家が動き出す。 <b>低迷</b>	戦後の男女共存社会。都市の発展。生死の際を逃れて、経済発展へ向けて動き出す。世界に追いつこうとした対外的競争が、男に追いつこうとする女との国内競争に変換する。「生死」という非劇を忘れて「私欲」という喜劇が流行る社会。 <b>疲弊</b>
男社会	個人の財産所有に道が開かれ、欲得競争の中で弱い者いじめが始まる。同性への攻撃。 <b>正義の混乱</b>	経済の優遇に甘んじた者が、それを失うまいと保身に傾く。同性への排除。 <b>正義の崩壊</b>	社会的運命の選択は、個々人の競争意識に委ねられる。同性への背信。 <b>正義の消失</b>
女社会	戦争による男性減少の中で、より良い伴侶の選択を目指す。自己の可能性。 <b>女性美の提示</b>	戦争による経済低迷の中で、男任せの運命に準じる。自己の拘束。 <b>女性美の主張</b>	戦後の経済発展の中で、有益な夫獲得競争に乗りだす。自己の選択。 <b>女性美の崩壊</b>
男女間	生活の安定を求めて、本人より地位や財産という付属物を目当てに自分を売り込む女たちと、愛よりも自分の将来の利点に結びつく伴侶を得ようとする男たちの駆け引き。 <b>愛の対価</b>	自己の経済と運命を共にする男社会の法則に、自己の愛を奪われる女。愛は男主導の社会規範に制御される。 <b>愛の拘束</b>	男たちのそれぞれの生き方を通して、社会や私欲ではなく、人間的道義に基づいた愛の選択を迫る。 <b>愛の正道</b>
愛の行方	多数派による少数派の圧迫。強者による弱者の圧迫。軟弱化した男と強くなった女。 <b>愛と金を天秤にかける</b>	ひとつの社会的権力が、個人を圧迫する。強者同士の結託と弱者の排除。 <b>愛より金を選ぶ</b>	今ある社会の礎となったのはかつての強かった男たちではなかったか？過去への賞賛。 <b>愛が金に勝つ</b>
漱石	多数派におもねて自己を失い女に翻弄されず、共存せよ。 <b>女性に動じない</b>	自己を維持するために女を制圧するのは無謀なことだ。 <b>女性を認める</b>	女に自己の運命を委ねるべきではない。 <b>女性を超える</b>
	<p>人の社会は人が作るもの。「道義的自分」があるから人である。それがなければ「人でなし」だ。「人でなし」が作った意識のぼんやりした社会はいずれ滅びるだろう。道義を軽んじた『吾輩は猫である』社会で子供たちによって死が崇拜され、道義を押さえつける『草枕』社会で那美さんに死を突きつけられたにもかかわらず、それに注意を払わず道義を犠牲にして得意になった『虞美人草』社会に死が忽然と現れる。</p> <p>その「死」という悲劇は予測できて途中で止めることはできない。自ら「快樂」という汽車に乗り込み喜劇に高じる人間は、その加速を楽しむことに夢中である。否応なくその汽車に荷物の如く積み込まれる人間は、徐々に加速する汽車から降りたくても降りられない。行き着くところまで行って壁にぶつかなければ崩壊できない運命にある。それが人間の欲であり、その作り出す文明であり、それを著す文学である。漱石はその汽車に乗ることを拒んだ。</p> <p>常に死と隣り合せの人生であるからこそ、懸命に賢明に生きなければならない。そして、愛は権力に踊らされるものであってはならず、権力で裁かれるべきものでもない。</p>		